

# 子どもの発達と教育についての一考察

## A Consideration of Child Development And Education

中野靖彦

Yasuhiko NAKANO

### I 今の子どもの様態

#### 1. 時代の変化と子どもたち

切れやすい、自己中心的、コミュニケーション能力不足等々、‘今どきの子どもは・・・’と大人たちは言う。

ピアジェ曰く、もともと子どもは自己中心的であり、発達ともに脱中心化がなされ、大人へと成長する。しかしながら、少子化とともに子どもの親離れ、親の子離れが遅れ、脱中心化がなされずに成長しないまま大人になる子どもが増えた。

大人自身が便利な社会生活を享受し、我慢できない、他人とふれ合うことを嫌がるのを見ている子どもに我慢強くなれ、自立しなさいといっても無理であるし、説得力がない。子どもは社会を映す鏡であり、大人社会がそのまま反映されているといっても過言ではない。

木原（1999）によると、江戸時代には社会も劇的に変化することもなく、父親の価値観がそのまま子どもに伝えられ、長男は生まれた時から跡継ぎと決まっているし、家訓等で代々、親から子へ受け継がれてきた。それでも親子にはズレはあったと想像される。

ところが、今の時代は移り変わりも早く、親の世代と子どもの世代の価値観の差は大きい。世代間断絶はより激しく、世代間の価値観の共有はさらに難しい。大人には到底理解できない行動が今の子どもには見られる。そして‘今どきの子どもは’と嘆く。

‘今どきの若者は’という云いぐせは今始まったことではなく、昔から世代間を越えてリレーされてきたようだ。

#### 2. 閉じ込められている子どもたち

“いけません”

大通りはあぶないから／あそんではいけません

裏通りも車が入ってくるから／自転車乗りはいけません

公園はせまいから／野球をしてはいけません

「いけません」の檻のなかに／とじこめられている ぼくら

木のぼりができないのは／のぼる木がないから

足が弱いのは／走りまわる広場がないから

「いけません」は ぼくらが／投げかえす ことば

(1972年度版 子ども白書)

いま、子どもたちの遊び場がない、屋外での活動が少なくなっていると言われていたが、すでに40年以上も前から、子どもたちは戸外から屋内に閉じ込められてきた。年々、子どもたちの運動能力の低下が叫ばれているが、子どもを取り巻く環境の変化を考えれば当然である。

平成22年度の小・中学生の全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果【概要】が示された。年々体力の低下が指摘されている中で、全体としてみると平成20、21年度と比して変化が見られなかったという。

ただ全ての子どもの運動能力が低下したというより、運動をする子としない子どもの2極化現象が生じているようだ。また、1週間の総運動時間が60分未満の児童生徒は、「家の人と運動やスポーツの話をする」頻度が低いという結果がある。日頃、スポーツをやっていない子どもの家での会話がなげないのは当然である。スポーツをやっている、家庭でも話題になれば子どもたちも一生懸命にスポーツをやる。体力も上がる。このような正のスパイラルとは反対に、家で話もしない、ますます屋外でゲームに熱中し運動しなくなる、体力は落ちるといった負のスパイラルに入る子どもとに分かれる。

### 3. 忙しい子どもたち

夜寝る時間が遅く、朝なかなか起きられない子どもが増えている。国をあげて、早寝、早起き、朝ご飯を奨励し、子どもたちの健康増進を掲げても、なかなか改善が見られないようだ。

愛知県教育委員会が子どもの生活実態について調査した。

塾や習い事の日数をみると、週4日以上が小学生で約60%、中学生では20%前後に減少する(図1)。これは中学生になると部活動などが忙しくなるのではないかとのことである。

小学5年生で、昼間眠かったことが「ときどきある」まで含めると、40%強の子ども「ある」と回答している(図2)。また、就寝時間についてみると、半数の子どもが11時ごろまでに就寝しているが、11時半以降も20%近くいた。その子たちの昼間眠かったことがあるかの問いに、

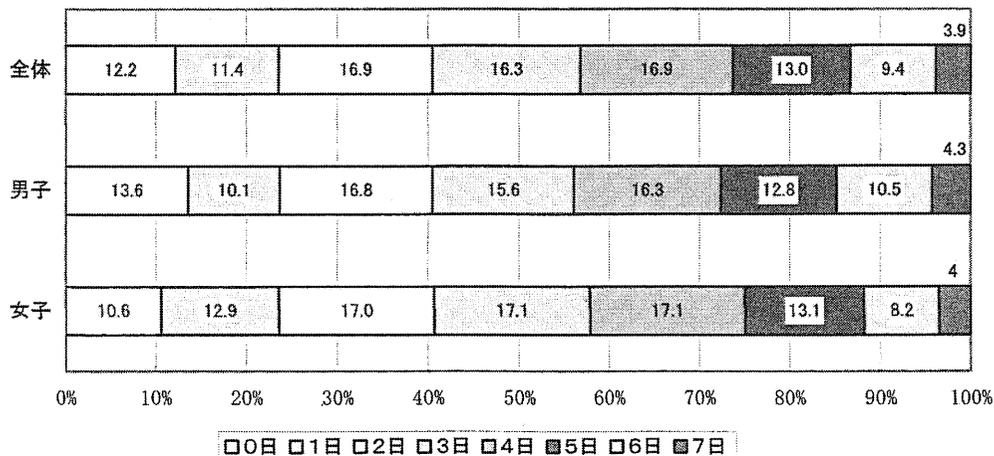


図1 塾や習い事の日数(小5)(愛知県 2009)

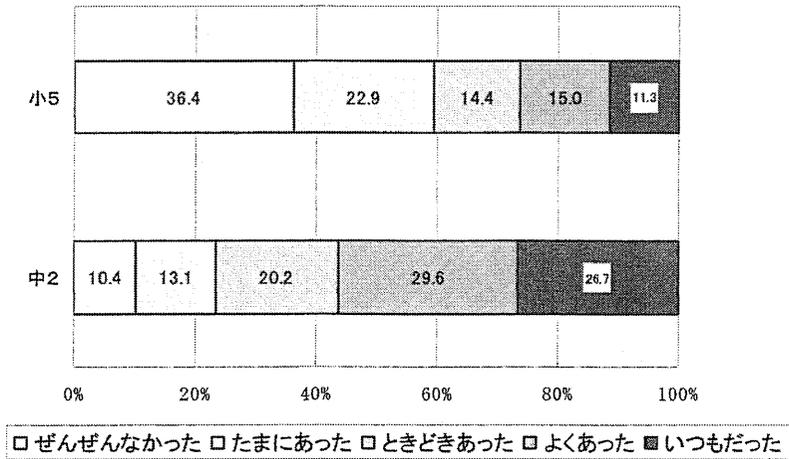


図2 昼間に眠たかったこと (愛知県 2009)

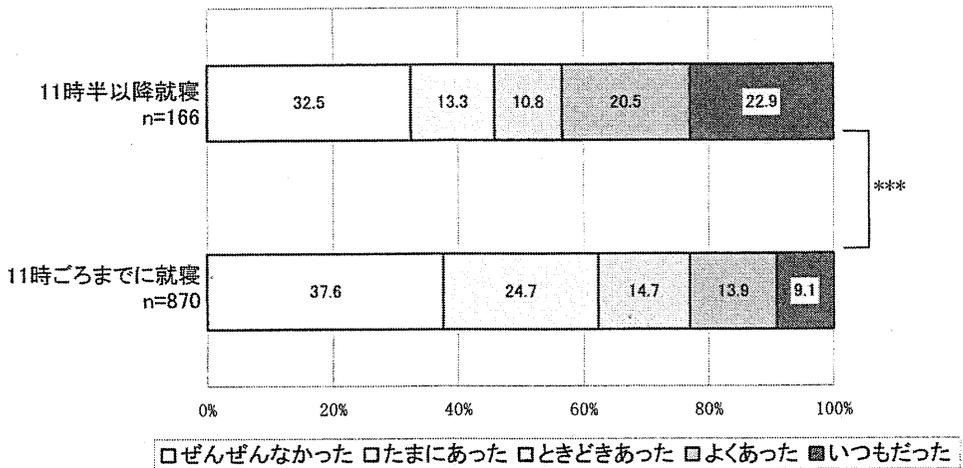


図3 就寝時間と「昼間に眠たかったこと」の関連 (小5) (愛知県 2009)

「ときどきある」が55%前後となっている (図3)。

夜遅く寝て、学校で眠くなる。このようなライフサイクルでは子どもの疲労感も強く、学習の集中力も低下するし体力も落ちる。また小学校4年生を境にして、お稽古事と学習塾に通う子どもの比率が逆転し、お稽古事とは疎遠になっていく。そして、塾に精を指す子どもの夕食時での家庭の会話は、当然のことながら勉強や塾のことである。そうなれば発達とともに子どもの体力の低下は明らかである。以前、子どもたちが地べたに座り込むをよく見かけた。

#### 4. 情報過多の時代と子ども

‘あなたは、いま心は満たされていますか?’と問われて、イエスと心底から応えられる大人はどのくらいいるのだろうか。物質的に豊かになり、高望みしなければ大抵の物は手に入る。家庭にいながら買い物はできるし、見知らぬ人たちとのコミュニケーションも可能である。

さらに最近では、パソコンと携帯電話が合体し、マルチタスクに対応する機器なるものが登

場した。ますます便利になるが、われわれ人間がマルチタスクを使いこなせるだけの能力を持ち合わせているのだろうか、そこまで人は成長しているのだろうか。これまで機械を操作する主体であった人が、さらに進化した機械に操作される時代になった。ハード面の進化が著しく、われわれは単にキーを押すだけの機械化された人間になっていく。

そう考えると、物質的豊かさに比例して、人の心も本当に豊かになったのかと疑いたくもなる。知らず知らずのうちに情報化の渦に巻き込まれ、豊かになったと勘違いしているだけではないか。忙しさだけを実感し、心のどこかに隙間風が吹き、寂しさを感じている人もいる。

今は、子どもから大人まで、携帯電話がなければ人とともに付き合えない時代となった。携帯電話の普及によって、子どもたちの生活パターンが変わりつつある。生活時間帯が大人に近づき、寝るのが遅くなる。どうしても朝が遅い。ゆっくり朝食をとる時間がなく、慌てて学校に行く。忘れ物が多くなり、学校にいてもボーとしている。子どもたちが遊びや趣味でインターネットを利用し、忙しくしている姿を見ると、何のための情報化はよく分からない。

さらに、情報モラルの低下によって、いじめ等も問題が依然としてあとを絶たない。相手の顔を見て話す場合、どうしても相手に不愉快な思いをさせないという配慮が働く。しかし、顔のないコミュニケーションでは声だけで判断する。電話の声はトーンが上がり、自分の声に相手がどう反応したか判断に苦しむ。ましてやメールとなるともっと顕著になる。手紙と比べて、メールの文章は短くなり、短絡的である。メールを使えば思いはストレートに伝わるが、思いもかけない一言が相手にボディブローとなる。発信した子どもにはいじているつもりはさらさらないが、相手はいじめや嫌がらせと受け取る可能性が大きくなる。

家庭でパソコンの利用時間についてルールのない家（小学生）が70%強にもなる。子どもの利用に親がほとんど関与していない実情も見逃せない。

## II. 心と体の健全な発達を目指して

### 1. 身体と心の健康

いま小学校での午前中の子どもの様子を見ると、まだボーとしている、集中力がないと指摘する学校関係者がいる。その中に36度未満の低体温の子どもである場合も多いようだ。

その原因として新陳代謝の低下を指摘する専門家もいる。学校や家で思い切り汗を流し、走る回る姿を見かける子どもが少なくなったとすれば、新陳代謝はよくなるし体温は上がらない。

早寝、早起きをして身体を動かすことは、偏に、規則正しい生活リズムを作ることである。規則正しい生活リズムができないと体力も低下し、精神的にも安定しない。心のリズムも崩れる。体温が1度下がると免疫力も30%落ちるというデータもあり、体力低下、運動不足、低体温と悪循環のスパイラルの陥ると大変なことになる。

1990年以降、体温が35度台の子どもが増加している（図4には小学生のデータを挙げる）。それは、体力の低下や運動不足と大いに関連していると予想される。これでは心と体の健全な発達は望めない。

(小学校)

1978年 (%)	1990年 (%)	1995年 (%)	2000年 (%)	2005年 (%)
①背中ぐにゃ 44	①アレルギー 87.3	①アレルギー 88.0	①アレルギー 82.2	①アレルギー 82.4
②朝からあくび 31	②皮膚がかさかさ 72.6	②すぐ「疲れた」という 77.6	②すぐ「疲れた」という 78.4	②背中ぐにゃ 74.5
③アレルギー 26	③すぐ「疲れた」という 71.6	③視力が低い 76.6	③授業中、じっとしていない 77.5	③授業中、じっとしていない 72.5
④背筋がおかしい 23	④歯ならびが悪い 69.9	④皮膚がかさかさ 71.4	④背中ぐにゃ 74.5	④すぐ「疲れた」という 69.9
⑤朝礼でバタン 22	⑤視力が低い 68.9	⑤歯ならびが悪い 70.8	⑤歯ならびが悪い 73.2	⑤皮膚がかさかさ 65.7
⑤雑巾がかたくしぼれない 20	⑥背中ぐにゃ 68.7	⑥背中ぐにゃ 69.3	⑥視力が低い 71.7	⑥症状が説明できない 65.1
⑥転んで手が出ない 20	⑦腹痛・頭痛を訴える 65.5	⑦腹痛・頭痛を訴える 66.7	⑦皮膚がかさかさ 67.4	⑥視力が低い 69.1
⑥何でもない時骨折 19	⑧転んで手が出ない 62.3	⑧症状が説明できない 63.5	⑧ぜんそく 62.7	⑧平熱36度未満 60.1
⑥腹のてっぺり 19	⑨症状が説明できない 61.9	⑨平熱36度未満 60.4	⑨症状が説明できない 61.9	⑨体が硬い 60.1
⑩懸垂ゼロ 18	⑩ちよつとしたことで骨折 58.4	⑩転んで手が出ない 55.7	⑩平熱36度未満 60.9	⑩ボールが目にあたる 58.6

図4 「からだのおかしさ」の実感 (子ども白書 2005)

全国学力テストにおいて、朝食を取る子どもの学力が高かったという。朝食をしっかりとる子どもは、朝早く起きていし睡眠時間もしっかりと取っている。心身のバランスが取れていて、自分の勉強するペースややり方が分かることは勉強にも集中できる。

こうした中で、食育の大切さが指摘され、栄養教諭が生まれた。教室での食の指導によって子どもたちの健康増進に役立てようとのことである。

いま家庭でも個食、孤食が増え、子どもたちの食事にも偏り、コミュニケーションに欠ける。家族団らんの中で、子どもは日頃の思いを何気なく漏らす。親はそこから子どもの心の揺れを感じる。食育の重要性は、単に子どもの身体の健康や栄養だけではない。食事を通して、心と体の健康を考える取り組みである。

2. 子どもの社会性を育てるために

個性化教育が叫ばれ、家庭でも学校でも個性が尊重され、各自が自由に意見を述べるのが大切とされてきたが、社会性の欠如やコミュニケーション能力不足が目立ってきた。この個性化は日本の少子化や経済的な豊かさという社会全体の流れと関連している。

たとえば、日本サルも、かつては群れを作らずに単独で行動していたという。それは餌が豊富であり、それぞれが好きなものを取って行動できた。しかし、山林が開発され人の手が入るようになると、サルの群れはだんだん山奥に追いやられていった。そして食べ物が限られてくるようになって初めて、群れを作るようになったという。群れを作って、ボスが統率し、餌を分け合って生きていく。そうでなければ生きていけない。

物不足で質素な生活を余技なくされていた時代には、お互いに助け合い、励まし合いながら育ってきた。物質的な豊かさではなく、人と人の付き合いで豊かに生きてきた。しかし、いまわれわれ社会を見渡せば、物が豊富で、他人に頼らなくても生きていける。まさに、サルが豊かな物で満たされていた社会と重なってみえる。豊かな社会になり、一人でも生きていけるために、わざわざ集団を作って助け合う必要はない。

人は社会的な豊かさに満喫している間に、人と人とのつながり、心の豊かさを忘れてきた。家庭の教育力や社会の教育力の低下は、まさに人間的なつながりが薄れてきた証である。個人

が大切にされ、他人と協調しなくても生きていけるのである。

学校でも個性化教育が強調され、集団で活動する機会が減ってきた。さらに学力の低下に伴って、授業時間の確保が問題となり、教科の時間の確保のために、遠足や運動会などの特別活動が減り、ますます集団での活動時間がなくなった。子どもたちは個の世界に入り込んでいった。社会性の欠如やコミュニケーション不足は、子どもたちがこのような社会の変化の影響を受けてきた証である。

このような子どもの社会性の欠如や個人主義がはびこったのも、豊かさが追い打ちをかけているが、いまさら時代を逆戻りさせることは不可能である。豊かさの中で個人を取り戻し、仲間意識をどう取り戻すかがいま喫緊の課題である。

ルソーは、『エミール』の中で、「子どもを不幸にするいちばん確実な方法は、いつでも何でも手にいれられるようにしてやることだ」と述べている。

### Ⅲ. 学校教育を考える

#### 1. 教育の変遷

かつては、学校では一斉授業が中心であり、教師が教え込むことで教育活動がなりたってきた。受験一辺倒の詰め込み型が幅をきかせた時代もあった。その反省からの転換が‘ゆとり教育’であった。そして総合的な学習時間が取り入れられた。“多くを教える”教育から、“少なく教えて多くを学ばせる”教育への転換がなされたのである。

ところで一斉授業と総合的な学習時間での教師の役割や教え方、力量にはどのような違いがあるのだろうか。一斉授業では教師主導であり、主として教科書を中心に進めることができる。それに対して、総合的な学習は子どもが主体となり、教師が支援に回るというように、教師の役割の担い方が変化した。

しかしながら、これまで‘教科書を教えてきた’教師が、‘教科書で教える’という頭の切り替えが十分になされずに総合的な学習が導入された。結果として、授業の準備に時間と手間を要し、ますます教師に余裕がなくなった。ゆとり教育は、教師自身もゆとりをもって教材研究に時間を費やすことも目標としてあったはずである。

もう一つ、総合的な学習では決められた教科書がない。教師はシナリオのない授業に直面した。シナリオのないことは、一方で、教師の采配で授業が進められ、独自性が発揮できるはずであった。だが教科書を教えてきた教師が、明日から教科書なしで教えなさいといわれても戸惑うことも多かった。これまでに蓄積した‘経験知’がその人の教科書になり、その教科書によって教えなければならないのである。

そもそも、総合的な学習の導入にはそれなりの教師への体験等の研修内容、および十分な準備期間が必要であった。

いずれにしても教育活動でもっとも大切なことは、教師が教えるべきことは教え、子どもに考えさせて行動させることは子どもに任せるという、教育のメリハリが大切である。必要なことはしっかり教え込み、子どもたちが主体的に学ぶべきことは積極的に学ばせる。それができ

れば、基礎的な学力の低下も防ぐことも可能であるし、好奇心をもって積極的に探索し、行動できる子どもが育つ。

好奇心をもった総合的な幅広い思考は、特に理系の教科には強く求められる。そのことは日本学術会議（2007）でも、またノーベル賞受賞者も述べていることである。幅広い思考はデボノの主張する「水平思考」であり、創造的な思考である。これは一つの答えにまっしぐらに突き進む「垂直思考」とはまったく異なる。「正解は一つである」に拘っていると創造力は生まれない。

## 2. 学力の低下の課題

学力というと、学力テストで測定したものという考えがあるが、これまでも見える学力と見えない学力の論争があった。そして見えない学力の大切さも唱えられてきた。

総合的な学習の導入は、一つには見えない学力の育成があった。それは国際学力テストやペーパーテストで計る内容とは異なるものであり、暗記を主体にしたものではない。

アインシュタインが、「教育とは学校でならった全てを忘れた後に残るもの」ということを述べている。歴史の年号や公式のようなものは専門的に学習しなければ、卒業と同時にだいたいは忘れてしまうものである。しかし、学校生活ではさまざまな活動を通して、目に見えないが多く何かを学ぶ。それは社会に出た後に役立つ、いわば「生きる力」である。

すでに指摘したように、入試一辺倒の詰め込み型の教育の反省から、問題解決型の“自ら考え、判断し、行動する人間の育成”に方向転換してきた。それが「ゆとり」教育であった。

ゆとりそのものを否定する人はいないと思う。しかし、国際学習到達度調査（PISA）の結果等を受けて、「脱ゆとり」教育への転換が図られた。2010年、PISA にもとづいての公開シンポジウムが開かれ、教育政策の変化が話し合われた（2010.12.19.新聞報道）。

公開シンポジウムでの松下教授の発言にもあるように、PISA はあくまで筆記テストであることを忘れるべきではない、学びには数値では測れない論理もあるという。どのような尺度を導入すれば、「学びの力」が測定できるか考えなければならぬところである。

また日本での全国学力テストの結果についても論議されているところである。得点が下げ止まりと指摘する意見もあるが、一方で、教科書に出てこないような内容（活用）についてテストは相変わらず、あまりよくないようだ。

学力低下が囁かれ始めてから、フィンランドの教育が注目されている。フィンランドの教育の紹介によると、教員の多くが修士の学位を取得しているという。そして、単につめこみ主義での教育ではなく、得点の高さは教員の質の高さと教育制度にあるという。平等な総合教育といわれていて、少人数教育と補習制度で落ちこぼれが少ない、読書好きでもあるらしい。

学力低下以上に問題なのは、国際比較テストでも日本の子どもの意欲が低いことである。意欲が低ければ学力は上がらない。パソコンや携帯に熱中し、本離れが起こっているのは読む力も伸びない。じっくり文章を読む習慣を身につけないとますます学力も低下する。

## 2. これからの教育

### 1) 教師の個性を生かす

人には得て、不得手がある。当然のことながら、教師も人間である。ところが、一時期、教

師採用が減り、教員採用に受かるには試験勉強以外に時間を費やす暇がなかった。成績優秀で合格した先生が途中でドロップアウトしたこともある。また、親の学歴も上がり、子どもも多様化してきた学校で、とくに小学校で一人の先生が全ての教科を教えることは大変難しくなってきた。社会の流れに対応して、教師自身が多様な活動する場がなかったし、できなかった。学級崩壊もそのような流れの中で起こったことでもある。

子どもに確かな学力と生きる力の育成を求めるなら、教師の得意、不得意を教師同士で補い合う教師関係が求められる。自分の得意な分野を発揮しながら学級担任の役割を担い、教員同士が相互に連携していくことが必要となろう。そのためには、小学校の高学年での教科担任制もあってもよい。

教師自身が自分の得意分野をもつことは、教師自身の精神的な安定に繋がるし、自信をもって授業に望める。生き生きした教師に教えてもらうことは子どもには喜びである。

## 2) 教師の力量アップと教員養成について

教師の多忙さは以前から指摘されてきたことである。事務的な仕事に加え、子どもとのふれ合いも求められ、教師自身がゆとりをもって教材研究をし、授業に臨むどころではない。実際に、教師と生徒のふれ合い時間も増えている報告もある。

さらに、不登校児童生徒の増加や学校内での暴力行為の増加等、学校現場が抱える問題が増えている。そのために、大学の教職課程の課題、とりわけ教員の力量アップが課題となってきたのである。これまでも教員研修に加え、教員免許更新制によって教員として力量アップが計られ、さらには教員の修士レベルが要求されるようになった。このような中で、大学での教員養成の在り方も見直す動きがでてきた。

2010年の教職大学院協会総会で文部科学省から、教員の資質向上方策の抜本的な見直しの検討課題(例)が示されている。養成・採用・現職の各段階において教員に求められる資質能力は何か、免許・任用制度、大学の教員養成課程等々についての見直しの方向が示された。

諸外国、たとえばフィンランドの教員養成は学士レベル3年+修士レベル2年である。しかしながら、当初話題になったような教員養成6年制という年数だけを問題にしても、あまり議論にはならない。

実践的な指導力を身につけるための教員の養成をどうするかである。特に義務教育段階の教員養成については、これまでは主に教員養成系大学が担ってきた。しかも4年間で行ってきたのである。そして大学のカリキュラムも、ここ15年間ほどで大きく変わってきた。かつては道徳教育の研究や特別活動の研究、教師論や教科外活動などの授業はなかった。これらは、実際の学校活動に対応した授業であり、現場に出てもすぐにでも生かせるような内容になった。

それでもなおかつ教員養成の見直し論がでてきた。本当に実践的な指導力を身につける上で何が重要かである。その中で、まだ残されているのが教育実習や学校現場と連携できる大学の授業カリキュラムの構築である。

## 3) 大学教育と学校現場をつなぐ

これまで教育実習は、長い間4週間とか2週間の短期集中型で行われてきた。かつては学生

時代にクラブサークルに明け暮れて教員になって活躍している人が多い。クラブ活動でさまざまな人間関係を学び、そこで実践的な能力も身につけてきた。たぶん4週間の実習でも、かなり実践力を補うことができた。ところが、一時期、教員採用が減り、勉学に動まなければ合格しなくなった。クラブ活動に時間を費やすわけにはいかなくなった。そのような学生が、4週間の実習だけで現場に入るのはかなり無理もあると考えられる。4月1日から担任となり、40人の子どもと接しなければならない。

このような状況を考えると、教育実習の在り方そのものも考えることが必要となる。たとえば、週1日、授業のない日を選び、大学から通える学校に出向く。そして必要となる時間を確保する。そのほうが学校側も負担は少なく済むし、子どもとのふれ合いも増す。この方が学校現場の多くを学ぶことが可能のように思えるが。

実際に、企業へはインターンシップが行われており、大学から企業へ就職する場合には、比較的ソフトランディングがなされている。教員にとっても、大学から学校現場へのスムーズなランディングができればよいように思う。

そのためには、大学と教育現場を繋ぎ、より実践的な志向性を備えた教育研究者の養成が大切となる。

### 3. キャリア教育

いま就職氷河期といわれ、就職できない学生も多い。たしかに景気もよくない、採用も手控えられているという。ある学生が30社近く応募しても駄目であると嘆いていた。しかし、よく聞くと、30社に同じような形のエントリーシートを出しているようだ。これでは企業も採用するのは渋る。

最近では、企業も送られてくるエントリーシートに頼らず、企業が出向き、学生と直接会って決めていく傾向がでてきたという。学生が企業を選ぶ能力が求められると同時に、企業にも学生を選ぶ力が求められるようになった。

ところで、キャリア教育は、ふつうは高校くらいからインターンシップを導入しながら実施されている。しかしながら、最近の就職活動では‘選ぶ力’の重要性が指摘されている。自分の力量や適性を判断しながら、最適な就職先を選ぶことが求められるからである。選ぶ力、それは高校生になって突如、身に付くものでもなく、義務教育の段階からの教育が大切となる。その際、義務教育段階でのキャリア教育についての基礎となる力の育成が必要となる。

ただ、義務教育段階でのキャリア教育は、将来の職業選択に必要な能力を養うほうが大切であると考え、義務教育の段階からインターンシップを行うべきか迷うところである。自分な得意な分野は何か、自分では何ができるか等々、教科の学習や特別活動など学校での教育活動を通して、自分の力量を正確に判断し、実行できる力の育成が重要であろう。これが自己効力感に繋がる。

長所は立派な個性であるが、弱点も個性であると主張した人がいる。学校でも良いところを見つけて、主張することは幾度なく経験してきた。しかし、自分の弱点をしっかり受け止め挑戦する姿もまた個性である。弱点をバネに、その道の専門家になった人も多い。

挑戦する力は、高校や大学終了時に、‘選ぶ力’となって職業選択に生きてくる。

#### 4. 社会化と個性化のバランス

来年度から、小学校1年生で35人学級がスタートするようだ。長い間、40人学級が維持されてきたが、その間に様々な教育問題が起こり、子どもたちや保護者にも大きな変化が起きた。そのような流れの中で、少人数クラスの突破口ができたのである。

クラスのサイズと教師の指導法について研究した(中野 1991)。たしかに、クラスの生徒数が減れば、教師の心理的な負担が減って指導法にも影響が現れるが、最適な生徒数についてはさらに検討する必要がある。

社会に出て、40人近い仲間と一緒に活動する場面はそうはない。しかしながら、子どもたちと取り巻く社会環境、とりわけ少子化や核家族化、地域の連帯が薄れてきたことなどを考えると、いま学校でしか大きな集団で活動が体験できる場がない。他人との協力などを学ぶ場は学校でしかない。かつては、子どもたちはカバンを投げ捨て、近くの公園などで、日が暮れるまで野球やサッカーに熱中した。その間には異学年の仲間と喧嘩もしたし、協力もした。まさに実体験をした。ところが子どもたちの実体験の機会は確実に減った。公園で野球をするものなら喧しいと怒鳴られ、屋内のバーチャルなゲーム遊びへと追いやられたのである。

個性化と社会化は、ある意味では両極に対座する。われわれは、この2つを目指して教育してきた。号令一つで一斉に行動し、集団活動を主としてきた教育から、個性を尊重する教育へと変化する中でも、仲間や他人と協力しなければ生きていけない。

詰まるところ、集団の中に埋没せず、いかに個人の能力を発揮しながら社会に適応できるかである。それがいまわれわれに求められている‘社会化’ではないかと思う。

できれば、35人学級への移行にともなって、学校全体の運営に柔軟性ができ、学校独自の学級構成など、学校独自の体制で運営できれば先生も子どもももう少しのびのび教育や学習活動ができるのではと期待できる。

#### 参考文献

- ・愛知県 2010 「学校と家庭でともに進める情報モラル教育の在り方」愛知県義務教育問題研究協議会
- ・愛知県 2009 「子どもの生活実態調査 報告書」愛知県県民生活部社会活動推進課
- ・朝日新聞報道 2010 PISA に揺れる各国
- ・木原武一 1999 「父親の研究」新潮社
- ・子ども白書 1972版 日本子どもを守る会 編
- ・子ども白書 2005 子どもの「からだのおかしさ」の実感 日本子どもを守る会 編
- ・中野靖彦 1991 「教師の指導法に関する研究ークラスサイズと指導法の関連性についてー」愛知教育大学研究報告 第40輯
- ・中野靖彦 2010 機器の進化と人間 全国珠算教育新聞
- ・日本学術会議 2007 「これからの教師の科学的教養と教員養成の在り方について」
- ・鈴木寛 2010 「教員養成改革と教職大学院の展望」第3回日本教職大学院協会総会資料